

別紙

本件プロローグについて(全3頁)

	小森意見書の鑑定結果	一審判決の要約らしきもの (196頁末行～197頁末行)	一審判決の、さらに要約部分(197頁5～7行目)	
端	主体	江差町の外から、しかも全国からやって来るヤン衆を中心とした外の人々(20頁8行目)。これを抽出するための具体的な記述として、 ・日本海経由の北前船、つまり一枚帆の和船 ・人、人、人 ・出稼ぎのヤン衆たち ・ヤン衆たちを追って北上してきた様ざまな旅芸人	(一)江差 (二)江差町	江差町
	行為	ニシン漁のときに《外からやって来て》《宴が開かれ、江差追分が歌われ、賑わいをもたらし》、ニシン漁が済めば《外へ去っていく》(26頁10行目・30頁9行目)。これを抽出するための具体的な記述として、 ・南西の風が吹いてくると、その風に乗った日本海経由の北前船、つまり一枚帆の和船がくる日もくる日も港に入った。 ・松前江差の 津花の浜ですいた同士の 泣き別れ ・漁が始まる前には、網子合わせと呼ぶ顔合わせの宴が夜な夜な張られた。漁が終れば網子わかれだった。	(一)鯨漁で栄え (二)町の様子 但し、カッコ書として、以下のことを記述。 (追分の前歌に歌われる津花の浜や海べりの下町、山手の新地が、ヤン衆、旅芸人、その他の人であふれた様子、漁が始まる前後の漁師たちの様子、「出船三千、入船三千、江差の五月は江戸にもない」との有名な言葉の紹介、鯨漁が江差にもたらした莫大な富についての記録)	様子
	時間	「むかし鯨漁で栄えたころ」の「四月から五月にかけて」(31頁8行目)。とくに《五月》(31頁14行目)。これを抽出するための具体的な記述として、 ・むかし鯨漁で栄えたころの江差は、その漁期にあたる四月から五月にかけてが一年の華であった。 ・江差の五月は江戸にもない	(一)昔鯨漁で栄え、その漁期の四、五月が一年の華であったこと、 (二)当時	過去
	注釈			

別紙

展 開	主 体	《外から江差町にやって来る人々》が来ないこと(21頁3行目)。 これを抽出するための具体的な記述として、 ・人の叫ぶ声も船のラッシュもなく	(三)江差の町	江差町
	行 為	《外から江差町にやって来る人々》が来ないこと、《宴が開かれ、江差追分が歌われ、賑わいをもたらし》たことの不在(27頁7行目・30頁9行目)。 これを抽出するための具体的な記述として、 ・人の叫ぶ声も船のラッシュもなく ・陰鬱な北国のただの漁港 ・通りががりの旅人も、ここが追分の本場だと知らなければ	(三)町の様子 但し、カッコ書として、以下のことを記述。 (そのにぎわいも明治の中ごろを境に次第にしぼんだ、鯨の去った江差に、昔日の面影はない、冬の太陽に似た、無気力な顔、けだるく陰鬱な北国のただの漁港、鯨を煮た鍋の残骸等)	様子
	時 間	《五月》(32頁13行目)。 これを抽出するための具体的な記述として、 ・五月の栄華はあとかたもないのだ。桜がほころび、海上はらかな水平線にうす紫の霞がかかる美しい風景は相変わらずだが、	(三)現在	現在
	注 釈			
結 束	主 体	日本中の追分自慢というやはり《外から江差町にやって来る人々》(21頁10行目)。 これを抽出するための具体的な記述として、 ・日本じゅうの追分自慢を一堂に集めて	(四)江差	江差追分全国大会を昔の栄華が甦ったような一年の絶頂としてとらえた

未

別紙

行 為	<p>江差追分全国大会のときに《外からやって来る》、江差追分全国大会が終れば《外へ去っていく》(28頁6行目)これを抽出するための具体的な記述として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かつての栄華が甦ったような一陣の熱風が吹き抜けて行く 	<p>(四)とつぜんはなやかな一年の絶頂を迎え、生気をとりもどし、かつての栄華が甦ったような一陣の熱風が吹き抜けていく。</p> <p>* 1</p>	
時 間	<p>《九月》(33頁9行目)</p> <p>* 2</p> <p>これを抽出するための具体的な記述として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・九月の二日間だけ ・本件プロローグの章「九月の熱風」という題名と呼応 	<p>(四)九月の二日間だけ</p>	
注 釈	<p>* 2 かつてのニシン漁期に栄えた五月と、その季節とは一致しない江差追分全国大会が行われる九月とが対比されている(33頁4行目)</p>	<p>* 1 「幻のようにはなやかな」の「幻のように」が省略されている。</p>	